

書籍名	月夜の森の梟（ふくろう）	著者名	小池真理子
出版社名	朝日文庫	発行年月	2024年2月

本書は夫(藤田宜永)の闘病記というよりも、夫の死後の孤独、甚だしい孤独を妻(小池真理子)が綴った喪失エッセイです。

夫の肺に手のつけられない癌が見つかり、それまで順調に流れていた時間が止まる。なじみのある世界が、たった薄皮一枚を隔てて向こう側に遠ざかっていく。私たちの人生は、日頃忘れていますが、薄皮一枚で違う世界、孤独、絶望の世界が平然と素知らぬ顔で存在しています。小池はこれまで「孤独」という言葉を幾千回も小説の中に書いてきたはずなのに、「孤独」というものの実態など、何もわかっていなかったことを思い知らされます。夫は15歳のころからタバコを吸い始める。医者嫌い、めったに検査を受けなかった。それが夫の頑固な生き方、「末期がんが見つかったら、あとは何もしないで死んでいくのが俺の理想」というのが口癖でした。

2018年3月、余命は半年、ステージ4の肺がんの診断がある。それまで当たり前のように流れていた時間が完全に停止、二人はまったく見覚えのない想像もできずにいた別の時間の中に投げ込まれます。

夫は告知後、「文学も哲学も思想も、自分にとって無意味なもの」とまで言い切りました。夫が求めていたのは、死に向かう際の自身の心の安寧だけだった。この度小池のエッセイを読み、大変生意気ですが、小池がこれほどの文章の書き手という事実を初めて知りました。小池は夫の死後、朝日新聞土曜版で連載エッセイを書き始めます。正気を保つためにも、自分を救うためにも書きました。書くことで、同じような喪失を持つ多くの人たちの共感と励ましを得ることになり、自身も力をもらいます。エッセイの性質上、内容を多く語ることは控えますが、私にとって貴重な出会いでした。

もう1冊、評判の小説を紹介します。「青い壺」有吉佐和子(文春文庫)
本書は1976年1月から1年間文藝春秋に連載されました。
半世紀が過ぎ、現在ベストセラーとなっています。何故なのか？

岩 城

編集後記

先日、新聞一面に「緩和ケア広げて」～診療報酬加算 がん・エイズ・末期心不全のみ～を見つけた。最近よく耳にするホスピス型住宅増との関連性は？ 緩和ケア病床は2024年度で468棟/9,746床(日本ホスピス緩和ケア協会)、がんの死亡者の内緩和ケア死割合は12.2%。がん死の受け皿不足、緩和ケア医の不足が背景にある。そもそもWHOでは緩和ケアを、ユニバーサルヘルズ・カバーレッジ(全ての人が受けられるべき医療)の1つに位置づけており、病気により制限されないはず。一方日本ではがんを中心に緩和ケアが発展してきた経緯がある。がん以外の病気でも緩和ケアが必要だという声は強く腎不全患者でも終末期に苦痛を訴える声があり、国が体制整備に向けて踏み出したということ、毎年6月に発出される骨太方針に慢性腎臓病対策として「腎不全患者の緩和ケア」を初めて明記し、進む一歩としたい表れのようなのだ。

さて、新規開設ホームの約1割がホスピス型住宅に相当(TRデータテクノロジー)に納得される方も多いのでは？事業者は名だたる上場4社以外にもたくさん登場してきており、傾向は住宅型が8割、特徴はその他住宅と比べ月額費用が安く、居室面積が狭い。平均要介護度はホスピス型住宅の方が高く、訪問看護が併設/近接している。緩和ケア病床とのベッド数推移を比較すると、令和3年にほぼ同数、4年以降はホスピス型住宅がグッと伸び、今後その勢いは止まらないだろう。エリア内訳は関東が4割、北陸・中部3割弱、関西1割程度。

アメリカ元大統領のジミー・カーター氏(98歳)はホスピスカアを受けながら「終末期を自宅で家族と過ごす」という決断を下し治療をやめた。ドイツでは3種のホスピスがある、(軽度)訪問ホスピス⇄入所型ホスピス⇄病院の緩和ケア(重度)。人は必ず命を終える、その瞬間にいかにも暮らし、どんな人たちと過ごすか。永年在宅医療に携わる医師は、生と死をめぐる、ヒトの価値観が揺らぐ時代と云う。

発行所:ライフデザイン研究所 編集人 伊藤 両親の場合、兄弟・友人の場合、自分は？ 秋刀魚 千日紅

所在地:〒541-0048 大阪市中央区瓦町3-4-87サビエル2F Tel 06-4708-6844 Fax 06-4708-7067

万国旗



玉入

